荒山の民俗

橋本操六

一　概　観

荒山部落は五万分の一地形図の「森」図幅で、久大線杉河内駅と天が瀬駅の間の台地上にある小部落である。日田郡天が瀬町に属する。総戸数七戸で、全部衛藤姓である。本家は台地北麓の玖珠川畔にある湯の釣部落に下って旅館業を営んでいる。湯の釣部落の衛藤姓四戸は荒山部落の出身である。金凝神社の氏子であったが、伊勢神宮の遙拝所を鎮守としている。檀那寺は玖珠町の教念寺である。

二　年中行事

正月

〔正月の支度〕　二五～二八日頃に餅を搗く。二九日には搗かない。餅を搗いた日が年取りである。アンマメシといって餅に餡をまぶしたものを食べる。オカガミ餅は一臼餅である。細長い餅を三本の箸でおさえ、輪切りにしたものをテヌクメともいう。竹の枝につきさして餅花を作る。餅は三～四斗くらい搗くので、三～四月頃まで正月餅がある。

〔トシノバン〕　松竹梅を立て、神仏にも供える。その年に不幸のあった家には「お淋しい晩です。」という挨拶に行く。

〔元日〕　一二時をまわると女が若水を汲む。若水で八八夜の茶の葉で茶をたてる。男は塩と米を持ってイゴウ（井川）に行き、「年の始めの若男、万の宝我ぞ汲み取る。」と歌いながら塩と米を撒く。す早く柄杓で水を汲む。汲んだ中に米が入っておれば縁起がよいという。五馬や大原に元朝参りに出かける。

昼頃から相年始が始まる。衛藤一統が集合する。各戸は全員分の餅を持ち寄る。お椀に餅を三こ入れる。全戸分の雑煮を食べる。栗の枝で作ったクリヘイ箸を多く作って置くと俵が多くできるという。クリヘイ箸は御簾状にして下げておく。正月には金火箸を休ませるので、火鉢の火箸にもクリヘイ箸を使う。

〔二日〕　男は若木伐りに行き樫を伐ってくる。牛の道具（シリゲー・ムナゲー・ハラオビ・ニナワ・ヒキオ・ミズノ）などを作る。女は縫い初め、子供は書き初めをする。

〔一四日〕　モグラウチ。四尺ほどの棒に藁で作ったホテをつけ、屋敷の周囲を打って廻る。

〔一五日〕　粥ダメシ。小さく切った餅を入れ、小豆御飯を炊く。五～六分の長さの親指くらいの竹の筒を入れる。竹筒には大豆とか大根とか作物名を書いておく。筒の中に飯粒が多く入っているものが、その年に豊作だという。門松を倒し、トンド焼きをする。

〔一六日〕　山の神祭で山には入らない。味噌汁の匂いがすると悪いという。

〔二〇日〕　ハッカコーバシという。柿の皮を臼で粉にし、お茶かけにする。

春から夏

〔初午〕　稲荷様を屋敷神にしている家の稲荷祠の前に、「奉納正一位稲荷大明神」と書いた紙幡を子供達が立てる。家主は小豆飯や餅を作り、子供に施す。紙幡が三日間残っていれば縁起が悪いという。長い間残っていれば厄病神が喜ぶという。

〔雛節供〕　最初の女の子の時のみ、雛餅を搗いて祝う。

〔五月節供〕　長男の時のみ祝う。粽を作る。二〇こくらいに菖蒲とフツ（蓬）を添えて配る。粽のからをフスベて雷除け

にする。

〔六月一日〕　オンバライ（厄払い）はホシヤのお祝い程度で、特別な行事はない。

〔作り上げ〕　田植終了後は作り上げや打ち上げという。うどんを打って各戸に配る。

盆

〔盆買物〕　七月五日までに日田に盆買物に行った。ローソク・素麺・麩・ひじき・若布・オサ鱈・黒糖（半斤程度）や子供達に下駄や浴衣を買った。駄にウセて帰る。三升樽の駄賃が五銭くらいであった。

〔七夕〕　六日は七夕のヨドで楽を金凝神社で打っていた。七夕楽という。夕方短冊などの準備ができてから、若竹を子供達が伐ってくる。夜の一二時を打つと、一番口が良いといって、イモガラの露を取りに行く。笹には短冊や麻殻で作ったすき・もーが・鍬など、や女が紙で作った衣類、魚取りの網をさげる。夕方にさげるため葉が枯れないように、手桶に水を入れてつけ、軒下に置いておく。手桶の水は捨てずに、物を磨くのに使う。野菜や七夕饅頭を膳にのせ、門口に朝まで供える。饅頭はつぶし餡で塩味である。

七日の早朝に七夕を川端に立てる。稲の朝露をかぶると達者になるとか、美しくなるといって露をかぶる。水浴したり髪を洗った。いつまでも若々しいというためである。朝食後の食器は釜に入れて煮て、灰をつけて洗う。男は墓掃除をしたり、牛をきうりの蔓で洗う。牛切りという。谷さらいといって、飲料水の水路の掃除や宮掃除をする。夜には青年（男）はお宮に泊り、盆踊りの稽古を始める。

〔一三日〕　夕方五時頃墓に迎えに行く。弓張提灯・線香・麻殻の杖を持って行く。盆が来たから行きましようやといって迎える。帰りにはろうそくに火をつけて帰り、仏檀の灯明にうつす。黄粉や砂糖をつけた米粉団子を作る。ショロサマダンゴという。団子につけるものや形は十五日まで毎日変える。盆鱈を煮付けや酢漬けにして食べる。

〔一五日〕　里芋の芋をつけた葉に素麺・煮〆や団子を入れ、芋の毛で結んで供える。仏の数だけ膳を作る。赤飯か小豆飯

を作る。夕方の六時頃、提灯に火をつけて送って行く。墓の灯籠に火をつける。帰途は提灯の火を消す。

〔盆踊り〕　一三日から始める。団七・ヨイトナ・コヤオコシ・マッカセ・サエモン・六調子・千本搗きなどを踊った。木蓮尊者の踊りであるツボカリから始めた。

〔十六日〕　一人前の膳を作る。仏が残っていると悪いからだという。盆鱈を必ずつける。

〔二四日〕　地蔵様祭である。盆踊が済んでから、御馳走を持って戸主が地蔵堂に集合する。オミキアゲをして一二時頃までお通夜申しをする。

秋から冬

〔八朔〕　お宮に参る。作業を休んでサクホメをする。田畑毎に酒を入れたオミキスズをほこう。四月の社日様の日に田の神が来て、八朔に帰るという。

〔イモニギニツサマ〕　芋をふかして、月には見えやすく、子供には見えにくい所に供えておく。芋は丸盆にひきにくる子供の数ぐらいを供える。とうきびも入れる。子供がひきにくる。

〔マメニギニツサマ〕　豆・栗・柿を供える。

〔彼岸〕　彼岸団子を作る。お寺に参る。オザマエリといって、部落内の各戸の仏檀に参る。

〔お伊勢様〕　一三日がクニチのヨドで、山芋などをそろえる。一四日の昼に全員がお宮に参り、御馳走を食べる。甘酒祭である。

〔亥の子〕　初亥の日には、餡入りの丸餅を重箱に入れ、嫁に持たせて里に帰す。亥の子餅をくわせんと蠅が帰らんという。中の亥の子が炬燵あけである。

〔ホガケ〕　収穫のうちあげをホガケという。女中やアラシコの慰労をする。これが済むと冬仕事が始まる。

〔ヒモトキ〕　三才になった一一月一五日に、親戚を招いて、ヒモトキを祝う。ヒモトキの膳や椀を与える。七才の時は、金時の絵を描いた越中褌をしめる。

〔藪神祭〕　一一月二四日に、祭のない神の祭をする。藪神祭という。
〔三夜祭〕　一二月二三日は三夜様とかお日待という。「横寝はしても人の悪口は言うな。」といゝ、徹夜でお日待をする。
〔冬至〕　ボーブラ（南瓜）を食わんと中気にかかる、とか夏に腹がせく、といって南瓜を食べる。

三　人生儀礼

出産

〔帯祝〕　五か月目の戌の日にする。赤の岩田帯で一丈二尺である。閏年は一丈三尺である。岩田帯は嫁の里が贈ってくれる。産婆にしめてもらう。産婆や部落内の女を招く。
〔出産〕　産気づけば男は他所に追いやられる。納戸で産む。五〇年前はしゃがんで産んだ。エナは小鹿田焼の土瓶に入れて、納戸の床下に置く。エナの上を虫が通れば、その子は虫をこわがるという。子供の黒子はエナで撫れば消えるという。へその緒は保存しておく。腹痛の時はへその緒を切って煎じて飲めばよくなるという。
〔命名〕　三日目に名をつける。遅くとも一一日目までにつける。仲人か親がつける。
〔宮参り〕　男児は三一日、女児は三三日目に部落のお宮に参る。氏神である金凝神社には祭の時に初参りする。
〔初誕生〕　誕生餅を配る。つぶしの塩餡である。餅を年の月の数（閏年は一三）だけかるわせて、よく歩けば突き倒す。

婚姻

〔縁組〕　相手は親がきめる。仲人の交渉には酒一升、雞と提灯を持って行く。提灯は帰途に必要となる。ヒギワメには仲人が再度行く。結納金はない。カネツケといって、部落や友人との別れの宴を開く。婿がはけを作って贈る。
〔荷送り〕　祝言の前日に嫁入りの荷を送る。カネツケザケ三升・塩鯛・目録・柳樽・ワケモンダル三升・茶・親兄弟へのみやげものなどである。柳樽は両親が健在であれば二樽、片親の時は一樽である。親兄弟へのみやげは、男親には扇子、女親

には反物、兄弟にはシャツである。

〔祝言〕　当日婿方から荷物取りに行く。荷取りの人に酒を出す。赤鉢巻をした荷取りの人は酒に酔って、よろよろして持って行く。荷取りの帰った後に、仲人と婿が迎えに来る。宴を開き、嫁を物言いに出す。

嫁はまず両親に挨拶をし、先祖の霊に参る。座敷からあとずさりして出る。途中までは婿と一緒であるが、婿は先に帰る。嫁はナカヤドに入る。用意ができたことを知らせに、婿方が提灯をつけて迎えにくる。嫁はニワを通って台所から入る。桝としゃもじを持ったテヒキオンナが案内する。嫁方はテヒキオンナに祝儀を渡す。嫁は婿方の仏檀に参り、その後で三々九度を始める。色直しは吸物の回数とほゞ同じで、三回ほどする。吸物はオテツキ雑煮と貝類である。披露宴の最後は「オテツキました。」とか「飲み込みました。」とかいって終る。ありつけ婆さんは婿の家に泊る。

葬式

〔ハヤオブク〕　死ぬと、北枕にして六間屏風を立てる。枕元に灯明・線香・花を各一本立てる。ハヤオブクを炊いて供える。

〔講中〕　寺には道具を運びに寺やといが行く。親戚には「死亡者名と期日、粗膳を差上げ候。。。」と記した呼び状を持って知らせに行く。二人で行くのが本来であるが、戸数が少ないので一人で行く。死んだ日に各戸主が寄ってヨトギをする。一二時頃に握り飯やオボンモリを出す。遠い親戚があれば、ヨトギが二晩になることもある。

〔湯灌〕　湯灌は葬式の日の午前中に、膳を出す前にする。納戸の畳をあげ、竹で作ったサナの上でする。髪は戸主やミジケーモン（近親者）が剃る。剃刀は押すだけで引いてはならない。戸主が十文字に剃る。白の着物を左胸に着せる。額に三角布をつける。

〔納棺〕　死体が動かないように棺に藁を積める。ハヤオブクを入れる。棺は仏間の床の間の反対側に安置する。僧侶が来るまで、棺の上に鉈や鎌などの刃物を置く。猫が寄りつかないようにするためである。僧侶は湯灌の時に使った剃刀で剃る真

似をして、オコゾリをいただかせる。何を書いてあるか見たことはないが、何か書いた紙を入れる。

〔葬送〕　松明を道のワカサレ（分岐点）ごとに立てる。墓穴についたら、先頭に行ったウーテ（大きな松明）を穴の中で円く振り廻してから西向きに埋める。ウーテトボシは前回葬式を出した家からである。穴の深さは八尺ほどである。喪主が穴にまたがり、四隅から一鍬ずつ土をかける。この時に足を踏みかえてはならない。後は近親などが土をかけ、最後は組の人が処理する。土饅頭の中心になるように線香立てを立てゝおく。墓石を立てる時の中心にする。墓石は東向きに立てる。土饅頭の上で不要になった道具を焼く。

〔オトキ〕　膳には吸物・ヒラ（油揚）・カキマゼ（酢あえ）・味噌汁などが出る。引き物として線香一把を添える。戸主の膳だけである。穴堀りや大工には清めの酒を出す。

〔寺参り〕　式の翌日、親戚の人などと寺に礼参りをする。

〔逮夜〕　百か日までは七日ごとに僧が参る。七日目か一四日目に、組の者と親戚が集まって「忌中寄り」をする。百か日にはお茶入れをする。

〔年忌〕　一～三年くらいで、長くは続かない。

八月一一日には湯の釣部落の溪仙閣（衛藤武夫）で、一二日には荒山部落の部落長（衛藤熊太）宅に集合して下さった話者は、衛藤ヨシノ（明治二九年生れ）・衛藤太平（明治三〇年）・秋吉ロク（明治三一年）・河野リウ（明治三一年）・衛藤満（明治三三年）・衛藤登（明治三五年）・衛藤武夫（明治三六年）・衛藤静子（明治三七年）・衛藤熊太（明治四〇年）の諸氏である。